Japan Society of Educational Information

新入生の文章力に対する一考察

片山　章郎*1

<概要>学生の文章力の低下が気になっていた。そこで、今年から「情報科学」という1年前期に開講している授業でほぼ毎週レポートを課した。レポートはペンによる手書きで提出させた。論文を作成することは、新入生にとってたいへん難しく、特に文章表現では論理的文章を構築することに慣れておらず、たいへん苦労していた。苦労したレポートを添削した上で返却ことにより、新入生は文章に関心を持ち、向上する点もあった。
<キーワード>文章表現，添削，論理的思考，手書き，電子メール

1．はじめに

ここ数年、ゼミの卒論指導で学生の文章力の低下が気になっていた。学生も卒論作成に費やす労力の中で、研究結果を論文にまとめるのがもっとも難しいといっていた。元新聞記者の先生とも話し合った結果、論文形式で書くことが少ないのではないかということになり、早い時期から論文を書くことに慣れさせる必要があるという結論に達した。そこで、筆者が担当している、1年前期開講の「情報科学」という授業で、授業内容に関連するレポートを課した。レポート提出は 12 回の授業のうち 9 回で、ほぼ毎週のペースであった。その 9 回のうち論文形式は 7 回であった。書く枚数はレポート用紙（B5 サイズ）1 枚以上であり、レポート作成の日数は 3.5 ～ 4 日（授業は２クラスで授業日が違ったため）であった。提出されたレポートに対して筆者が添削し、翌週の授業の開始時にレポートを学生に返却してから、約 10 分間ぐらい解説をした。

レポートは手書きで作成させることにした。というのも、前述の元新聞記者の先生と相談したところ、次のような理由で文章書きは手書きが原則であり、手書きの訓練を重ねて文章作成作法を身につける必要があると思われたからである。

1) 漢字の誤用をしてしまう。機械が打ち出す文字列はなんとなく完成度が高いような錯覚を抱かせてしまう。手書き原稿であったなら絶対に書かないような漢字を見逃してしまう。
2) 記者がパソコンで原稿を書くようになって文章が荒れ、校閲・校正が大変になった。

2．実践結果

1 回目の授業で、レポート作成で必要な注意事項として、次の注意点を説明しておいた。

・５Ｗ１Ｈに基づいて書く。
・序論、本論、結論という構成になる。序論では課題に関係した導入部分を書き、本論では文献を使って論旨を展開し、結論で自分の意見をまとめる。

細かい点は各学生に対して添削することで指導していった。

提出されたレポートの中で、特徴的なことは次のようなことであった。

1) 1 回目に提出されたレポートの約 90 %が鉛筆書きであった。２回目の提出前にペン書きの必要を説明した上で、２回目以降はペン書きで提出させた。しかし、中には鉛筆で書いた上にペンで清書した学生もいた。
2) 文献に新聞を利用しなかった。→新聞記事 CD-ROM のＰＲ不足。学生にとって文献の調査手順は 1 番目が図書、2 番目が雑誌であり、雑誌までで必要な文献が揃ったと思ってしまった。
3) 文体の不統一。→「である」体に統一できず、「です・ます」体が混じる。
4) 「ら抜き」言葉が多かった。→「考えれる」「みれる」の多用。
5) 話し言葉で書き、かつ 1 文が長かった。

*1　KATAYAMA,Akio　：　順正短期大学　　e-mail = katayaa@kiui.ac.jp

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

→「～みたいな」「～だし、」「～けど、」の多用。

6) 文献を使った上で、自分の意見をまとめることが苦手であった。→文献と自分の意見とがつながっていなかった。文献に書いてあったことを自分の意見としてまとめに使っていた。

7) 文献を誤って使っていた。→求めている課題と関係ない文献の使用。

8) 論理的に文章を作成するのに慣れていなかった。→段落間が論理的に結びついていなかった。

なお、文章を作成する際によく指摘されるのが、敬語の誤用である。しかし、今回は敬語を使用する場面がほとんどなかったので、気になるほどではなかった。

ほぼ毎週レポートを提出していた学生にとって、筆者からの添削結果には非常に関心を持っていた。返却時には必ず、学生同士が添削されたレポートを見せ合ってお互いに講評をし合っていた。添削の必要がなくてコメントが少ないと、もっと何かコメントすることはないのかと学生に言われたこともしばしばあった。学生とのコミュニケーションをとったり、文章表現を向上させる上でいろいろなコメントを書き加えた添削は重要であった。そのコメントの中でも、田中[1]が指摘しているように、「ほめ言葉」と「具体的改善例」は特に重要であった。まず「ほめ言葉」であるが、ほぼ毎週レポートを提出している学生にとって、返却されたレポートの中に部分的にもほめられたコメントがあると、書くことの苦しみの中にも喜びを感じていた。自らの表現が人に伝わり、人の認められるということが、書く喜びの基本であることを再確認させられた。「具体的改善例」では、筆者が修正や修正例を赤字で示すことにより、学生が少し文章表現の改善に向かった。上記の特徴のうち、3)、4)、7)は回数を重ねるうちにほとんどの学生が改善した。しかし、5)、6)、8)は向上した学生もいたが、特定の学生を中心になかなか改まらなかった。

3．学生へのアンケート結果

授業期間中に、ほぼ毎週のレポートはきつい、課題が難しい、文章を書くのが苦痛だといったことを学生から聞いていた。そこで、学生はレポートを書くことをどのように感じたのか、最終授業時に調査票を配布し、自己記入後直ちに集めた。調査対象は「情報科学」の最終授業を受講した本学保健専攻1年生30名と保健福祉専攻1年生44名の計74名であった。有効調査票は72枚で、有効回答率は97.3%であった。

質問項目は、レポートに対する評価、ペン書きの必要性、文章作成の労力、自分の意見をまとめること、電子メールの利用、興味を持ったレポート課題、レポートに対する意見であった。レポートに対する評価、文章作成の労力、自分の意見をまとめること、電子メールの利用については、その理由も自由記述形式で記入してもらい、筆者がまとめた。

レポートに対する評価を表1に示した。レポート提出に対して、「よくない」と「ややよくない」とを合わせて48.6%であり、約半分の学生が反対グループになっている。反対の理由として、「問題が難しい」や「ほぼ毎週提出はたいへん」といったことが挙げられている。ほぼ毎週のレポートは学生にとって負担になっていた。反面、「よい」と「ややよい」を合わせた賛成グループ(33.3 %)には、「授業の理解に繋がる」や「勉強に取り組む態度を養える」といった学習効果が現われている。しかも、ほぼ毎週のレポート提出をたいへんと思っている学生は1人に過ぎない。ただ、レポート提出に賛成しているグループも反対しているグループも、「欠席しても、レポート提出すると点がもらえる」という理由が多い。これは、単位認定を筆記試験(70点満点)とレポート(30点満点)の結果で行い、出席を取らなかったためである。レポートさえ書いておけば、賛成グループは授業に出なくてもいいことをラッキーと受け取り、反対グループは授業に出なくても出席扱いになるので不公平であると感じているのである。

文章作成の労力の度合いを表2に示した。「きつかった」と「ややきつかった」とを合わせて91.7%であり、「楽だった」という学生は1人もいない。きつかった理由として一番多かったのが、「頭で考えたこ

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

とを文章で表現すること」(31.0 %)である。次に「文章を書くこと自体が難しかった」「問題が難しかった」(共に 15.5 %)である。半数近くの学生が文章を書くことの苦しさを理由に挙げている。筆者もよくあることだが、頭ではわかっているのに、読み手にわかるように文字で表現することに相当苦労したようである。また、文献を使って書くことにも慣れていないため、文献をどのように使って書けばいいのかわからなかった学生も 11.3 %いる。

自分の意見をまとめる難しさを表 3 に示した。自分の意見をまとめることは「難しかった」と「やや難しかった」とを合わせて 69.4%であった。学生にとって、文献から得たことから自分の意見をまとめることも難しかったようであるが、文章作成よりは楽になっている。自分の意見をまとめるのが難しかった理由として、やはり文章にすることが上位に来ている。また、問題が難しいという理由が 2 番目にきている。「易しかった」「やや易しかった」という約 3 割の学生は、意見を述べるのが得意だったり、意見を考えるのに易しいも難しいもないと思っている。

「問題が難しい」という理由は、レポートに対する評価、文章作成の労力、自分の意見をまとめることの 3 項目に共通して、上位に顔を出している。図書館に必要な文献が揃っているし、問題そのものは決して難しいものではないと思っている。しかし、学生は問題が難しいと思っている。中西 [2] が指摘しているように、自分自身の考えを書けというレポートは正当の予測ができない、オリジナリティを求められることである。新入生は、高校までの作文では求められているものを察知し、それに向かって書いていた。ところが、学生自身の生活と結びついていなかったり、学生が経験したことがないことを文献を使って論理的に考え、最後にオリジナルな見解を導き出すという作業に学生は慣れておらず、その上正解がないことに対して難しいと感じたのではないかと筆者は考える。

レポート提出をペン書きにさせた。ペン書きの必要性を 2 回目の授業で説明したにもかかわらず、「ペンで書くべき」と「ややペンで書くべき」とを合わせて 58.3 %であり、ペン書きが必要であるかどうか何とも思わない学生が 31.9 %いる。ペン書きを否定する学生は 9.7 %に過ぎない。ただし、ペン書きが必要であると思っている学生でも、33.3%は鉛筆書きのほうを望んでいる。

今や電子メールが学生の間でもたいへん流行している。電子メールの一日の送信回数の平均は 10.4 回で、標準偏差は 8.98 である。最大は 50 回である。電子メールは文字情報の伝達であり、文章表現を考えるのにも役立つ手段とも考えられる。「電子メールを送る際文章を考えていますか」という質問には、「考える」と「少し考える」とを合わせて 94.1 %に達している。電子メールで送る理由(複数回答)を表 4 に示した。「文章だから、言いたいことを伝えられる」「言いにくいことでもメールなら伝えられる」という文字を意識して電子メールを利用している場合もある。だが、学生が電子メールを使う大きな理由は、携帯電話で話すよりも料金の節約になるし、相手の状況を気にする必要がないからである。電子メールは話をする代わりに文字で用件を伝える場合が多い。文章を考えて送るといっても、絵文字を多用したビジュアルな用件伝達用の文章と論理的な文章では文章表現は違うと思われる。ちなみに、文章作成の労力の度合いを点数化して電子メールの使用回数と相関を調べた結果、相関関係はなかった。ただ、漢字変換に伴って漢字に興味を持ったり、自分の気持ちを素直に表す文章作成をする訓練になるのではないかと思われる。

4. まとめ

三浦朱門 [3] が述べているように、近頃の若い人たちは、文章表現より、造形的表現のほうが身近になっていて、文章は精々 4、5 行しか書くことがない。中西 [2] は教員に提出するレポートは「書くこと」には否定的な感情を示すという傾向があると指摘している。筆者がほぼ毎週提出させたレポートにもこのような傾向が窺われた。学生は卒業するまでにレポートを書く機会を増やして、少しでも論文を書くことに慣れる必要がある。そして、提出されたレポートに

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

は小さな点でもほめながら、修正すべき点は具体例を提示した上で返却する必要がある。

最後に、アンケートのレポートに対する意見のところに書いてあったことだが、「友達と協力してレポートを作成し、いろんなことを学び達成感があった。」という意見と「友達のを写して提出している人がいた」という意見があった。同じようなレポートはあった。それが共同研究結果か、単に友達のを写して提出したのかは判別がつかなかった。今回は、すべて共同研究結果だと判断して得点を与えた。しかし、今後は各人が独力でレポート作成をするように指導する必要があると思っている。

表1　レポートに対する評価

	度数	パーセント
よい	7	9.7
ややよい	17	23.6
何とも思わない	13	18.1
ややよくない	25	34.7
よくない	10	13.9
合　計	72	100.0

表2　文章作成の労力

	度数	パーセント
楽だった	0	0.0
やや楽だった	2	2.8
何とも感じなかった	4	5.6
ややきつかった	36	50.0
きつかった	30	41.7
合　計	72	100.0

表3　自分の意見をまとめること

	度数	パーセント
難しかった	26	36.1
やや難しかった	24	33.3
どちらともいえなかった	14	19.4
やや易しかった	4	5.6
易しかった	4	5.6
合　計	72	100.0

表4　電子メールで送る理由（複数回答）

	度数	パーセント
安い	46	68.7
必要なことだけで済み、時間と料金の節約	11	16.4
手軽	8	11.9
相手の状況を気にしなくてよい	10	14.9
言いにくいことでもメールなら伝えられる	13	19.4
文章だから、言いたいことをちゃんと伝えられる	7	10.4
話すほどでもない	5	7.5
メールのほうが話すよりも楽しい	5	7.5
もう習慣になっている	2	3.0
知らない人ともメル友になれる	1	1.5
合　計	67	

参考文献

1) 田中宏幸(1998)、文章添削指導の研究 ー大学生を対象にした意見文指導の場合ー、教育学研究紀要、第44巻第2部、49 p－54 p

2) 中西　淳(1998)、文章表現意識に関する考察　ー「書くこと」について考える実践からー、教育学研究紀要、第44巻第2部、67 p－72 p

3) 三浦朱門(2000)、若者の文章能力、群像(講談社)、第56巻第1号、244 p－247 p

NII-Electronic Library Service